

# 抄 録

## 1. 研究目的

不登校、いじめ等の学校不適應問題は、原因究明、解決策、予防策に関する研究、実践は積み重ねられてきているものの、その状況はなかなか好転せず、未だ学校現場における喫緊の課題となっている。また、学校不適應問題は、学校・教師の努力のみで解決するほど容易ではなく、家庭、地域、外部専門家等との連携が今や不可欠であると考えられる。

本研究では、学校不適應に関する課題の中から、外部専門家と学校・教師との連携に焦点を当てた検討を行う。外部専門家とのコンサルテーションを行う構成メンバーは、児童生徒の問題状況により、全教師であったり、管理職であったり、校内委員会のメンバーであったり、様々である。そこで、本研究では、コンサルテーションの構成メンバーに応じて、外部専門家がどのように教師に働きかけたらよいのかを、実践及び質問紙調査により明らかにし、「学校不適應予防コンサルテーションモデル」として提示する。

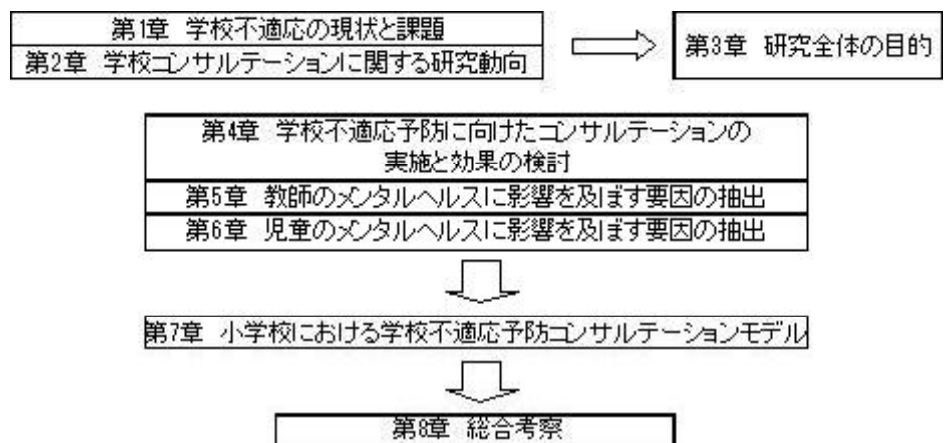
## 2. 研究全体の構成

まず、第1章で、本研究の背景となる学校不適應の現状と課題について述べた。第2章では、学校コンサルテーションに関する文献研

究を通して現状と課題について述べた。第3章では、第1、2章で示した問題点を受けて、本研究の意義と目的について整理した。

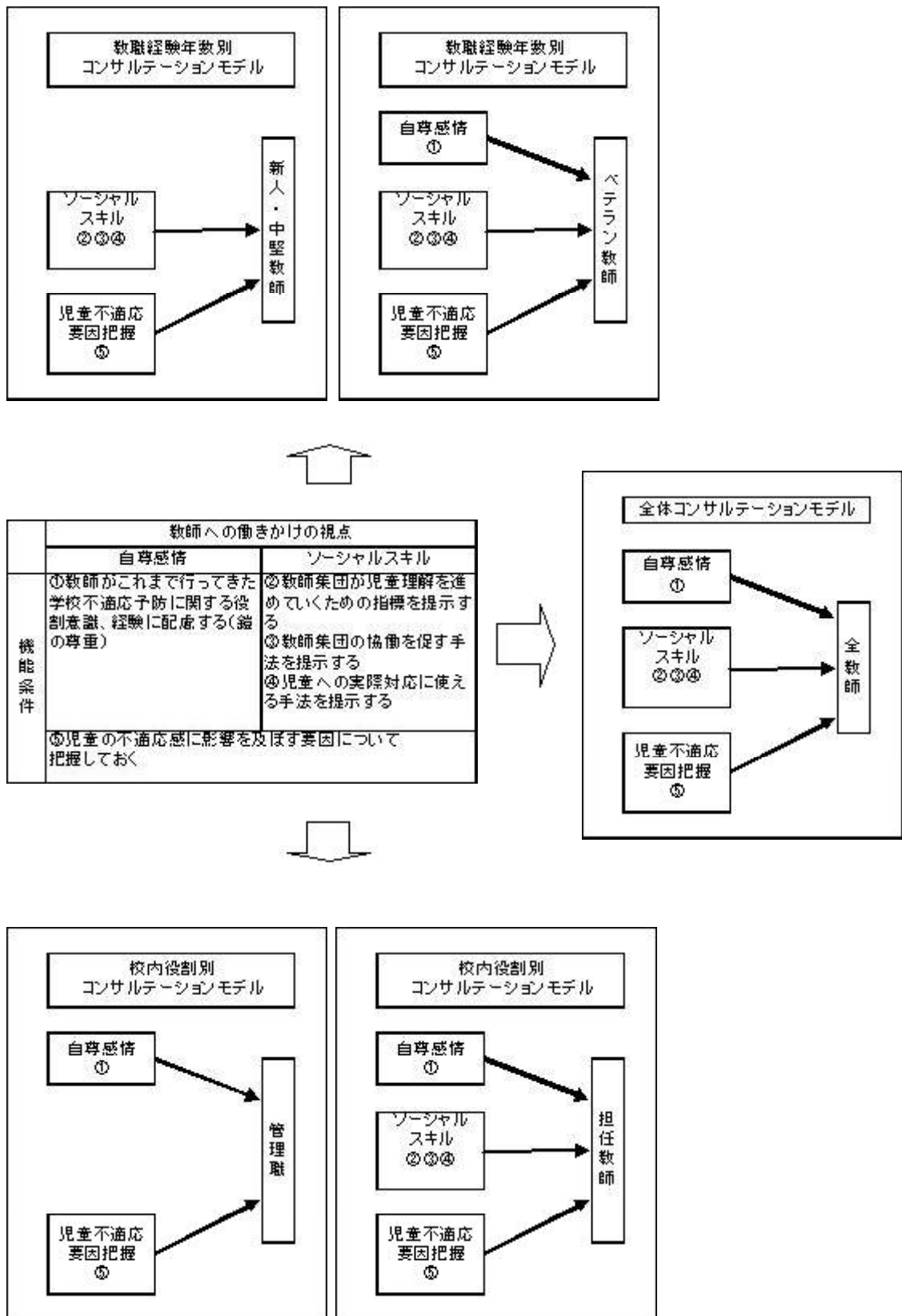
続く第4章では、3つの小学校におけるコンサルテーションを実施し、その効果を検討した。A・B小学校では児童の学校不適應予防に向けた、全教師対象のコンサルテーションを行った。一方、C小学校では発達障害児の理解・支援に向けた、校内委員会対象のコンサルテーションを行った。第5章では、教師のバーンアウトに影響を及ぼす要因を抽出した。外部専門家がコンサルテーションで学校に入る際、構成メンバーによって助言等の留意すべきポイントが異なる。それを明らかにするためである。第6章では、児童のストレス反応に影響を及ぼす要因を抽出した。直接児童にかかわる教師に伝えるべき、児童へのかかわりのポイントは重要である。それを明らかにするためである。

第7章では、3つの小学校におけるコンサルテーション実践、及び教師のバーンアウト、児童のストレス反応に影響を及ぼす要因をもとに、小学校における学校不適應予防コンサルテーションモデルを提示した。第8章では、研究全体の総合考察を行った。



### 3. 小学校における学校不適応予防コンサルテーションモデル

コンサルテーション実践、質問紙調査により、小学校における学校不適応予防コンサルテーションモデルを次のように作成した。



#### 4. 研究成果と課題

本研究は、学校不適応に関する課題の中から、外部専門家と学校・教師との連携に焦点を当てた「学校におけるコンサルテーション」の在り方を検討したものである。学校におけるコンサルテーションでは、対象となる教師集団の構成メンバーにより、働きかけのポイントが異なる（機能する条件）。それ故、コンサルテーション実践及び質問紙調査から、構成メンバーに応じた働きかけのポイントを明らかにした「学校不適応予防コンサルテーションモデル」を提示したことが成果であると考えられる。

今後の課題として次の2点が考えられる。第1は学校不適応予防コンサルテーションモデルの有効性の検討である。第2は子どもを支える保護者、地域と学校・教師との連携に焦点を当てたコンサルテーションの在り方を追究することである。